

第5講 丸山竹秋の足跡

倫理研究所の創設者である丸山敏雄が逝去した同月23日に開かれた臨時総会で、満場一致を以て、丸山竹秋が後任の理事長に選出された。その年度の事業報告には、「悲しみの中に新しい希望が見出された」と記されている。

本講では、第二代理事長就任以来、1996（平成8）年8月に退任して会長となるまで、足かけ45年もの長期に亘ってトップの要職を務め、倫理研究所と倫理運動の礎を築いた丸山竹秋の生涯と足跡について学ぶ。

(1) 倫理運動参画までの道のり

丸山竹秋は、1921（大正10）年3月29日に、丸山敏雄、キクの長男として福岡県に生まれた。教師であった父、敏雄の勤務する学校が変わるたびに、福岡、長崎、広島と各地を転々とする幼少期を送った。

そして、敏雄が「ひとのみち教団」の教師を志願するに伴い大阪に移転。教団が運営する「ひとのみち小学校」に入学するが（11歳）、寄宿舎生活であったため、以後、6年もの間、両親との別離を強いられるのである。

その後、同じく教団が運営する東京の中野中学校、旧制広島高等学校、東京帝国大学（文学部哲学科）に進学するが、その間に「ひとのみち教団」不敬事件が勃発し、父親の投獄、裁判を経験する。

1943（昭和18）年、大学を卒業し、同大学院に進むも学徒動員で出征。のち、1945（昭和20）年1月に陸軍中野学校二俣分校の二期生として入校し、やがて終戦を迎える。終戦後は父親の仕事を手伝いつつ大学院に戻り、第八高等学校（のちの名古屋大学）のドイツ語教諭の道を勧められるも、「父の手助けをする」という理由でその申し出を辞退し、倫理運動に身を投ずるのである。

(2) 研究業績

倫理研究所理事長の職務は、最高責任者として組織の事業の全般を総覧することにある。当所の場合、会員組織を通しての普及事業、教育事業、あるいは出版事業、そして団体名が示すところの研究事業に大別でき、さらには総務や経理に関する業務が加わる。

それぞれの部門に担当者を配置して業務に当たるのだが、とりわけ研究部門において終始一貫リードしてきたのが丸山竹秋であった。

その研究活動および成果は、毎月、月刊誌『倫理』に発表された。同誌に掲載された研究論文は約600本を数え、病が重くなって執筆がかなわなくなるまで、一度も休むことなく執筆は続けられたのである。そして、この研究成果は、晩年に提唱された地球倫理思想として結実するのである。

さて、研究業績の中でも特筆すべきは、純粋倫理研究の全ての基盤となる『丸山敏雄全集』を刊行したことである。全集の刊行を密かに決意したのは、敏雄の葬儀が神田の共立講堂で行なわれた昭和26年の暮れのことであったという。

準備の、そのまた準備期間に15年。その後、資料の蒐集と編纂とに数年間（これが実質的な準備期間にあたる）を要して、倫理研究所創立25周年記念事業として、全29冊に及ぶ膨大な全集の刊行に踏み切ることになったのである。

『丸山敏雄全集』全巻の完結をみたのは昭和56年のことであった。それは敏雄の葬儀の折、竹秋の胸中の構想から数えて、およそ30年日のことであった。

(3) 「富士高原研修所」の建設

倫理研究所の創立以来、会員に対する教育は各地域のさまざまな施設を借用して行なわれてきたが、会員幹部の間から専用の施設を建設して欲しいとの要望が高まってきた。

そこで、昭和39年から教育施設建設委員会が設けられ、候補地の検討が始まった。そして、いくつかの候補の中から、現在の御殿場市印野の丸尾の地に決定したのである。

昭和40年4月、6000余坪の印野の土地使用が正式に認可され、翌41年3月1日、溶岩台地の上に全国会員の浄財を得て建設された富士高原研修所が竣工。竹秋はその施設の総責任者として、講習の中心人物として、また研究員を目指す研究生の教育担当者として活躍したのである。

その開所式の挨拶で、「永い間、会員の方に不便をかけ、かつ、全国的に統一と系統だった教育が求められていたことが、ここに叶えられるようになったことは感謝に堪えない」と述べたという。

(4) 世紀の歩調

所歌「世紀の歩調」には、丸山竹秋の願いが込められている。その意味は以下の通りである。

① 第一番の歌詞の意味

あめつち
天地に 光みなぎり
さやかなる ひとすじの道
明るく ほがらかに
果てまでひびけ
世紀の歩調

「あめつち天地に 光みなぎり」は、宇宙の光線に満ちて、光り輝いているという意味で、宇宙に広がる大きな生命を暗示したもの。「さやかなるひとすじの道」とは、その宇宙に清々しい人間の生きる大道（世界平和、人類の幸福への道）が走っており、そこを明るく朗らかに前進していく私たちの歩調が、四方八方へ、響き渡れというものである。

② 第二番の歌詞の意味

大自然 恵み豊かに
はるかにも 行手かがやく
よろこび 働きて
高鳴りやまぬ
世紀の歩調

「大自然 恵み豊かに」は、大自然はあらゆるものを用意して人類の福祉にそなえつつあるとの意味で、一番の歌詞の「ひとすじの道」の行手は、その恵みで輝いているというもの。その恵みは、喜んで働くことによって、いよいよ豊かに得られ、そこに益々やむことなき世紀の歩調の音を高らかに響かせて進もう、との趣旨である。

③ 第三番の歌詞の意味

人の世に まごころ 純情あふれ
きずきゆく 文化のいしずえ
愛和の 旗かかげ
たずさえ進む
世紀の歩調

この歌詞は、人間の世の中が純情にあふれる時、文化が建設できるというものである。純情とはスナオのことであり、スナオによって文化の基礎、倫理の実践ができるのであり、そこに愛和の旗をかかげ、手を取りあって（たずさえて）前進しようという趣旨である。

*

「世紀の歩調」とは、未来永劫にわたって変わることなき、堂々たる歩調の意味で、明朗、愛和、喜働と、そして純情の実践によって世界の平和と人類の幸福を築く大道を、高らかに歩調を揃えて前進しようというものである。

晩年、丸山竹秋は、この世紀の歩調について次のように述べている。

この平凡な道を、みずからいかに歩み、いかにその内容を高め、深めてゆくか。そこに未来の進歩がある。実行すれば進歩、実行しなければ退歩である。やるか、やらないか、である。

出典：丸山竹秋「世紀の歩調」『新世』1996年1月号18頁